

美術館に就職した学芸員や保存担当学芸員、あるいはその助手さん達が最初に苦労することに、この「さらし」の結び方の習得というのがあります。

実はいろいろな結び方があるのですが、絶対というルールが2つだけあります。一つはもちろん加重がかかっても絶対に緩まない事。もうひとつは一カ所を引っ張れば（ほとんどの場合、短く垂れる方になります）、すぐにほどけることというこの2つのルールです。

↓すぐに解ける結び



まず2番目のルールを達成できる結び方を覚えるのも一苦労ですが、さらにその結び方で1番目のルールもきちんと達成できる様になるまで、結構、繰り返しの練習が必要です。

作品を扱う時は、「さらし」などで固定されている時以外は、どのような場合でも必ず手を添えるのが鉄則です。片手で作品を支え、片手で紐を解こうとした場合、誰かがこの「結び」のルールを破っていたら、結構、大変なことになってしまいます。

私も新人の頃、外部の美術輸送専門技術者の方に「だから素人に現場に紛れ込まれると困るんだよね」と言われた事があります。どんな現場もそうやって先輩方にいろいろ叱られながら、みんな育ってゆくんですよ。

その後、私はある一人の美術輸送専門技術者の方にまわりつき（残念ながら今はもう、その方は退職

されてしまいましたが)、いろいろなやり方を教えて頂きました。これはその時、最初に教えて頂いた結び方です。

↓ひとつのやり方

1



2



3



4



5



6



ところでこの結び、この間、本を読んでいた時、お着物の仮紐の結び方と同じ原理なんだなと気がつきました。着物の仮紐は、着物を着たら襦袢に使った紐を着付けた着物の合間から、帯が固定されたら着物に使った紐を固定した帯の下から、スルスルと上を壊さないように抜かなければならないので、やはりしっかり固定ができて、しかもすぐに解ける紐結びにしなければならないというわけです。

他にも仕事の上で習い覚えた紐結びが、日常の中で役に立っていることがいくつかあります。それはまたこのシリーズでおいおいと。

(N. N.)